

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第150号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成19年12月21日

アカショウビン



2007. 6. 3 大沼公園

撮影者 安 真一郎 (札幌市西区)



も く じ

私の探鳥地 (54) 野津幌川下流域 (札幌市厚別区)

札幌市厚別区 早坂 泰夫 2

2006年スズメの大量死と市民にできたこと

スズメネットワーク事務局 黒沢 令子 3

野付半島野付崎の野鳥 中標津町 中田千佳夫 7

天塩川中流域におけるカワウの記録

旭川市 磯 清志 11

ワキアカツグミの観察

日本鳥類保護連盟 柳澤 紀夫 12

探鳥会ほうこく 13

探鳥会あんない 16

鳥民だより 16

私の探鳥地 (54)

の つ ほろ が わ
野津幌川下流域 (札幌市厚別区)

札幌市厚別区 早坂 泰夫

私の住んでいる厚別区の地域では、代表的な探鳥地として「野幌森林公園」があります。休日などのゆったりした時などは出かけるには最適な場所です。今回紹介する場所は、「探鳥地」というほどの場所ではありませんが、私の家のすぐ近く、朝夕に野鳥の声を聞いたり、手軽にウォッチング出来る所です。会員の皆さんも家の近くにちょっとした鳥見が出来る場所をお持ちだと思います。そんな場所のひとつです。一回りして、1時間～2時間程度の広さの場所ですが、四季折々の鳥たちの姿を見るのがいつの間にか楽しみになりました。

春、晴れ上がった日のヒバリのさえずり、5月下旬に聞こえるカッコウのさえずりと、オオジシギの羽音、その後、日増しに聞こえる夏鳥の声、冬場に見られるカラ類を中心とした冬鳥たち。春や秋には、白鳥の群れが、数羽、時には数十羽上空を通過しているのを見ることがあります。

札幌の中心部から東に10kmほど離れた地域、江別市大麻のとなり、山本、小野幌、厚別北地域の野津幌川の下流域が主なエリアです。探鳥地と言っても、住宅地を流れている野津幌川、小野津幌川沿いの地域ですが、この地域は、ちょうど良い草原の環境が維持されていて、夏鳥の繁殖地になっています。また、冬季にはカラ類、ツグミ、レンジャク類、ムクドリなどが見られます。

10年ほど前、中学校建設に伴い、草原が少なくなっしまい、ノビタキやオオジュリン、コヨシキリなどが減少してきているのが気がかりです。

大きな探鳥地だけではなく、身近で小さな探鳥地も残していく必要性を近年特に感じています。会員の皆さんと情報を交換しながら大事にしていきたいものです。

<確認している野鳥>

アオサギ、トビ、ハイタカ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、コウライキジ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、コゲラ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、キレンジャク、ヒレンジャク、ミソサザイ、ノビタキ、アカハラ、ツグミ、ウグイス、ヤブサメ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、キクイタダキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ホオアカ、ホオジロ、アオジ、オオジュリン、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、ニューナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

そのほか、キタキツネ、エゾシカなどの動物も見ることが出来ました。



野津幌川下流域

2006年スズメの大量死と市民にできたこと

スズメネットワーク事務局 黒 沢 令 子

スズメといえば、日本では誰でも知っている身近な鳥です。人里ならどこでも、朝からチュンチュン鳴いているのをよく耳にします。一方、日本でスズメを研究している人は意外に少なく、長野県の佐野昌夫氏が先駆者ですが、北海道大学に現在、大学院生が一人いるくらいでしょう。そこで、地域での違いや、個体数、また分散の詳細などわかっていない点が数多くあります。このように身近なわりには調べられていないスズメが、北海道で2006年初頭に大量死を起こしました。この事例は道内外に広く報道されたので、記憶している人も多いと思いますが、本稿ではそれを記録するとともに、スズメの野外個体群への影響を評価する試みを報告します。

スズメの生態

ある鳥の個体群に異常が起きた時、まずはその鳥の生き方のどこに原因につながる要素があるかを調べる必要があります。例えば、スズメは社会性の鳥で、ふだんは数多く集まって暮らす性質があります。夏の終わりから晩秋には、数十から数百羽という群れになって、草原や川原などで草の種を食べたりします。また、夜には、常緑樹の茂みに入って群れて眠る、つまり集団ねぐらをとる習性があります。

一方、夏は繁殖のために夫婦水入らずで子育てをします。この時期には、雌雄はなわばりをもって他の個体を追い出すので、一定の面積にすんでいるスズメの密度は減ります。スズメは、洞になったところで子育てするので、その閉鎖空間に持ち込んだ餌とか、親やヒナのふけや糞が落ちたりするので、巣の中に虫や細菌が発生しやすく、不衛生になりがちです。そこで、スズメは毎回、新しい巣材をもちこんで巣を作ります。

成長したスズメの主食は草の種子ですが、北海道のような雪国では、冬に地面が雪に覆われてしまうと、種子を食べられなくなります。同じく豪雪地帯である新潟県の上越市では、冬には地上で採食する鳥はほとんど姿を消すという研究結果があります。しかし、地上性の鳥のうちスズメは、人家の周辺で居残るものがありました。これは餌台や農家の穀物のおこぼれなど、人由来の食物に依存しているからだと考えられます。

2006年の大量死事例

2005年の12月末から、日本野鳥の会の支部や行政窓口に市民からの問い合わせがありました。はじめは、庭に餌台を出していつもスズメが来るのに急に来なくなったと

か、いやに少ないという話でした。次にはスズメの死体が見つかるようになり、4月上旬の新聞報道をきっかけに報告が増えて、結局7月までに1,517羽の死体が報告されました。地域は北海道だけで、道央の都市域が多く、環境は



図1 スズメ大量死が起きた地域(支庁別)
大きい●は100羽以上死体が発見された支庁

ほとんど住宅地でした(図1)。結局、北海道のスズメ大量死は、2005年の12月末に始まって、2006年の3月までにだいたい終息しました。この冬の気象条件は、遅くまで雪が降らず、急に年末から正月にかけて、2~3日降り続くという特殊な降り方をしました。しかし、北海道では豪雪というほどの量ではありませんでした。死んだ鳥はほぼスズメだけでした。死んだスズメは共通してそ嚢炎を起こしていましたが、特に危険性の高いウイルスは見つかりませんでした。また、古い死体からブドウ球菌が見つかりましたが、死亡の原因と特定するには不十分でした。また、融雪剤などの塩分をとり過ぎたという意見もありましたが、こちらも高速道路のインターなど一部であった可能性はあっても全体を説明できるものではありませんでした。それから2006年秋になって、道外の大学でサルモネラ菌に絞って行った検査で、菌が検出されました。さらに2007年の冬には石狩市庁の一部でサルモネラ症で死亡したスズメが確認されました。このサルモネラ菌は欧米でイエスズメなどのスズメの仲間に大量死をもたらしているのと同じ型(ST株)です。これらのうち、どれが一番大きな問題だったかを確認するためには、個体群が健康な時とどのくらい差があるのかということを知る必要があります。比較する基礎的なデータがないと、何が異常事態かがわからないからです。

北海道のスズメは減ってしまったのか？

どのくらいスズメが実際に死亡したのかを推定することは大変難しい作業です。アメリカで風力発電に伴う調査をしたところ、死体が発見される率は、大型の鳥では比較的高くて75～100%ですが、小鳥ではせいぜい25%にとどまることがわかりました。しかし、日本ではこのような調査はありません。すると、2006年初頭に死亡したスズメは、見つかった数の何倍かわからないと考えた方がよいでしょう。また、北海道のスズメの数は減ってしまったのか？という疑問に答えるためには、過去のデータと比べる必要があります。しかし原生自然の環境にいる鳥類についての研究はそれなりにありますが、街中のスズメの研究はほとんどありません。そこで、スズメネットワークでは、過去の記録を掘り起こすと共に、新たにモニタリングをして行こうと考えました。

過去の記録を掘り起こしてみると、北海道大学の野鳥研究会という学生サークルや野鳥好きの人が毎月、道を歩いて鳥の数を数え、記録していることがわかりました。それらのデータをいただいて、解析してみました。例えば、札幌市の豊平川河川敷のように、比較的に自然度の高い所では、スズメは夏に増えて冬に減るパターンを示していました。一方、北大の構内のように住宅街に囲まれた所では、2000年を過ぎた頃から、冬もスズメが居残っているというパターンが見られました。また、野鳥研究会の調査は、2005年の12月から翌1月にかけてスズメの数が急減したのを示しており、まさに大量死の時点をつえていたのがわかりました。

では、なぜ北大構内ではスズメは最近、冬も居残るようになったのか、そしてどうやって雪の季節を乗り切っているのかを突き止める必要があります。

スズメ個体数への影響評価

次に、簡単な定点観察を市民に呼びかけて始めました。やり方は、自分を中心に半径50mを調査範囲とします。その範囲のなかで声が聞こえたり姿が見えたりしたスズメの数を記録します(図2)。1日5分間行ない、日を変えて

スズメモニタリング

調査方法

- ・市民参加型、定点観察
- ・午前中、5分間×10回の平均
- 季節：夏、冬

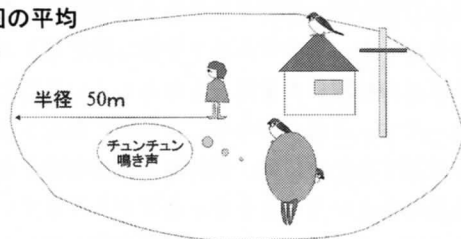


図2 スズメ観察のやり方

10回行います。たった5分間では見逃す場合でも、10回行なえば信頼できるデータになってきます。このスズメの定点観察は、スズメネットワークのホームページやフォーラムでもお知らせを行い、新聞報道にもなりました。そのおかげで、研究者を始め、一般の市民が参加してくれました。現在、北海道と関東を中心に、のべ43か所の観察地があります。

結果ですが、青森県を含む北海道などの積雪地域と関東などの雪のない地域について比べて見ると、住宅地では平均して3～4羽くらいスズメがいるのがふつうで、地域の

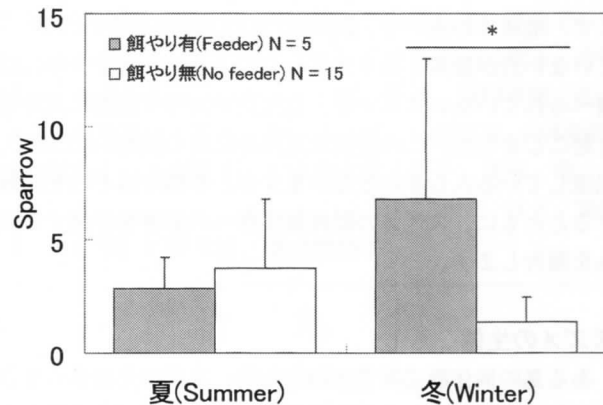


図3 定点調査の結果、冬期は餌台のある場所にスズメが集まる。
(バードリサーチ誌の許可により掲載)

差はありませんでした。季節で比べてみると、夏と冬ではあまり数は変わりませんでした。一方、雪国では冬に餌台を出している所と餌台のない所を比べると、大きな違いがありました(図3)。夏には、餌台の有無でスズメの数はほとんど変わらないのに対して、冬に餌台があると、スズメはそこに集中する傾向がみられました。

2006年初頭の大量死の後には、北海道のスズメは特に住宅地で半減したことがわかりました。しかし、2006年夏の繁殖期を経たのちには、関東地方と変わらない密度のスズメが見られました。北海道という雪国のスズメがどの位いるのが適正なのか、これから増えていくのかどうかは、長期間モニタリングをして初めて明らかになるでしょう。

スズメ観察の効果

スズメ観察員から、観察を始めてみると、今まで気づかなかったさまざまな自然の現象に目が行き届くようになった、という声が寄せられました。観察員が寄せてくれた感想を項目分けにしてみました。まず、この調査の目的である個体数について関心をもつのは当然ですが、その他に行動や体の形態、すむ環境、他の生き物との相互関係、さらに自分の観察技術についてなど、実に様々な分野に関心が払われたことがわかります。観察者はスズメ観察を通して、実に様々な分野で意識の変化や向上を経験していました。

例えば、スズメは口に物をくわえたまま鳴けるとか、雨の日はスズメが出て来ないなどの驚きを発見した人がいます。また、古い建物にスズメが巣を作ったのに、取り壊されてしまったと、生息環境が悪化していることに問題意識を感じた人、さらに、スズメがとまったのは何の木だろうかとか、子供が生き物に興味をもつようになったなど、より広く自然界への興味が広がった人もいました。また、スズメ観察を通して、田舎に住んでいた子供の頃を思い出し、自然の音を聞くようになった、聴覚もよくなった、という年配の方もいました。都会人の生活の健全さについて考えさせられる内容でした。

このようにスズメの観察は科学的なデータをとりながら、環境問題の意識に目覚めたり、情緒教育や癒し、和みを与えてくれたり、さらに健康の向上にも役立つなどの意外な効果がありました。観察のやり方は簡単で、誰でもできるので、小・中学校や高齢者サークルなどでもぜひ試してみたいと思います(図4)。

スズメ観察員の感想(33名)

(1) 個体数

課題意識

- ・2007年6月、例年になくスズメが少ないと感じた。
- ・身近な植栽に小鳥がよく飛来していて、緑の回廊になっているのが改めてわかった。オンコの茂みの中に集団で潜り込まれると、数え甲斐はあるが、正確には数えられない。やむなく10羽単位でおおざっぱに記録した。

問題意識

- ・夏にはよくいたのが、冬にはいない。時間帯が早すぎるのか?

発見

- ・インターネットで見たのと同じく嘴が黄色いヒナを見た。親から口移しで何かもらっていた。
- ・頬の点が薄いのが幼鳥らしい。
- ・スズメより大きい小鳥がいるのに気づいた。

(2) 生息環境

問題意識

- ・古い建物に巣があったが、取り壊されてしまった。
- ・巢内で1羽死亡していたので衛生が必要だと思った。古い巣材を全部出して汚れを掃除し、また元の位置に懸け直した。

発見

- ・巣は電柱や信号機に多い。
- ・巣の中を見ると、巣材が地層のように重なっていた。スズメは毎回、巣材を運び込んで巣を更新している。

(3) 相互関係

問題意識

- ・公園で給餌する人になついで人に依存している。
- ・カラスがスズメの巣をねらっていた。

(4) 行動

発見

- ・群れ(4羽くらい)でまとまって飛ぶ。
- ・争いらしい声を聞いた。体当たりでけんかしていた。
- ・ツバメと争う!?
- ・人が近くを通るとジクジクと鳴きながら威嚇飛行する。
- ・嘴にえさらしきものをくわえていた。
- ・初めて餌を見た。

スズメ観察記入用紙

(A)基本情報カード (No.)

観察者名 _____

調査地 〒 _____

(連絡先※個人の場合)〒 _____

Email(電話・Fax等) _____

環境 1)住宅地・2)繁華街・3)農耕地・4)工場・5)その他()

高さ 1)地上・2)3階以下・3)4階以上・4)その他()

餌台 1)家にあり・2)近所にあり(半径約50m)・3)なし・4)ほか()

インターネット利用1)あり・2)なし・3)ほか()

※備考(ご要望など) _____

問合先:スズメネット 黒沢令子 電話:011-706-5499 <kurosawa@pop.lowtem.hokudai.ac.jp>

(B)集計表

※行動(a 声だけや採食 b さえずりや争い c 巣材や餌運び d 子連れ e ほか)

No	月日	時刻	天気	成鳥 (幼鳥以外)	幼鳥	小計	行動	備考(気温など)
例	6/12	808-813	晴	2	2	4	d.子連れ.餌やり	28度 2羽色淡い
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								

※気づいたこと(行動、その他の鳥など)

図4 スズメ観察記入用紙

- ・昆虫を食べた。
- ・親が口移しで餌を与えた。庭で砂浴びをしていた。
- ・声が出たので見ると、ゴミ集積所で雨宿りをしていた。
- ・草をくわえて食べずに飛んでいった。
- ・餌台に雪が積もると嘴で雪撥ねをする。
- ・空中で虫を取るのには苦手。90度に曲がれない。
- ・スズメは物をくわえても鳴ける！
- ・スズメ以外にメジロもくる。
- ・時折、梅の花をついばむ。

興味

- ・とまっていた木は松の木かな？
- ・子スズメが餌ねだりする様子がかわいい。
- ・スズメ観察をしてから、子供が小鳥に興味を持つようになった。
- ・身近なのに今回観察するまで知らなかったの、行動がわかって面白かった。

(5) 観察技術

興味

- ・調査地以外の場所や時間でもスズメに気づくようになった。
- ・鳴き声とともに目の前に見る「スズメ」の姿にかわいらしさと安堵感を感じている。お蔭で小鳥の声に敏感になり、田舎での子供の頃の聴覚が戻ってきた。

課題意識

- ・飛ぶのが速すぎてあまりよく見えない。
- ・最初、声はすれども姿が見えなかったが、次第に見えるようになった。

餌台の功罪

最後に餌台の功罪を考えてみたいと思います。雪国の人にとっては餌台は冬の風物詩でもあり、雪の中の生活に和みをもたらすものなのでしょう。ところで、冬の間、餌をやらないとスズメはどうするのでしょうか？

スズメの本来の餌は草の種子なので、地面が雪に覆われてしまうと食べられなくなります。すると、スズメたちは本来は雪のない地方へ移動していくはずですが、実際に、室蘭などの渡りの通過地点で観察していると、他の小鳥達と同様に渡って行くスズメの群れを見ることがあります。

庭に餌台を置くとスズメがたくさん寄ってきますが、この生活パターンは彼らにとっては自然な状態なのでしょう。人に餌をもらい慣れたスズメ達は、人に依存心が強くなり、自立できなくなります。2005年末は西日本で起きた鳥インフルエンザ騒ぎのあおりで、野鳥から人に感染症が広まるのが心配になり、急に餌台をやめた人がけっこうあったようです。すると、雪国の住宅地に居残ったスズメ達にとっては、屋根に上がってはしごを取られたのと同じ

ことになります。

札幌で2006年12月に開いたスズメフォーラムの折に、来場者に餌台についてのアンケートをとってみました。餌台に来る生き物はまずスズメが多く、二位はカラ類でした。一番多い餌は、生米と鳥の粒餌でした。餌台を管理する頻度は、毎日という人は少なく、2～3日おきかそれ以上の場合が多かったです。餌台を定期的きれいにしないと、汚れがたまって、細菌の温床になりがちです。そこで、台の上に取り外しのできる皿のようなものを載せて給餌して、常に洗う習慣をつけ、餌台に汚れがたまらないよう工夫すれば、餌台の衛生を通じて、野鳥の健康を守れます。

スズメと暮らす道民の知恵

北海道は日本有数の自然の豊かな地です。生息する野生動物の種類も数も他地域に誇るものがあります。この豊かな自然を楽しませてもらっている住民として、私達は野生動物の健康的な生活を守ってやるのが、恩返しとなるのではないのでしょうか。例えば、市民にできることは、餌台を衛生的に保ったり、雑草を刈らずに残したりすることでしょう。これは、スズメの住む環境を整えてやることになります。スズメといえども野鳥です。彼らは自立して暮らすのが一番の幸せです。人は、スズメに「どこか暖かいところで冬を過ごしたら、来年また来てね」というスタンスで接するのが一番よいのではないのでしょうか。また行政面では、2006年のスズメ大量死を経験した北海道が全国に先駆けて野生動物保健所のシステムを整えることでしょうか。人と生活圏を共にする北海道の多くの野生動物が健全な生活を全うすることができれば、とりもなおさず、道民の豊かで健康な生活を支えることにつながるのです。

引用文献

- 岡徹・中村雅彦. 1998. 上越教育大学構内における非繁殖期の鳥類相—多雪地域において積雪が鳥類群集に与える影響—. *Strix* 16:55-66.
- Langston & Pullan. (翻訳) Pp. 25-83. 野鳥と風車 2007. 野鳥保護資料集第21集 (財)日本野鳥の会自然保護室. 東京.
- 黒沢令子・徳永珠未・小林和也・平田和彦. 2006. 札幌市におけるスズメ激減の記録 (2005/06年冬). *Bird Research* 2:A19-A24.
- 黒沢令子・長谷川理・泉洋江・越川重治. 2007. 2005/06年冬スズメ大量死後のモニタリング: 積雪の有無による地域比較. *Bird Research* 3:A19-A25.
- 藤巻裕蔵・一北香織. 2007. 北海道市街地におけるスズメ生息数の動向. *山階鳥学誌*. 38:104-107.

野付半島野付崎の野鳥

中標津町 中 田 千佳夫

野付半島は日本一の大きさを誇る砂嘴です。グーグルアースの天空からの写真を見ると、鎌首を持ち上げたコブラのように見えるし、はたまた京都東福寺の天井に描かれた龍の姿にも見えます。

幕末の蝦夷通辞だった上原熊次郎の「蝦夷地名考」ではその昔大きなクジラが流れより、その下あごがこの岬となったという言い伝えを紹介しています。アイヌ語で「ノツケウ」。下あごとか岬の意味を表します。

付け根から先端までは26kmもあり、車と徒歩で先端に到達するには早くても1時間半、竜神岬灯台の駐車場からだと3時間はかかってしまいます。

野付砂嘴は堤防のような北側に弓状に張り出したアウトラインと、それと大きな角度で交わるいくつもの分岐した砂嘴の集まりです。分岐した砂嘴の間には幾つもの湿地が形成され、干潮満潮で海水が入り出します。そこにはアッケシソウやエゾツルキンバイ、ウシオツメクサなどの塩湿地植物が群落を作っていて、シギやチドリ、カモ類の餌場や休息場になっています。

一方、砂嘴の上にはエゾカンゾウやノハナショウブ、ワタスゲ、クロユリなどの湿地植物からハマナスやセンダイハギ、シコタンタンポポ、エゾフウロウなどの海浜植物まで多彩な草木が生い茂り、オオジュリンやシマセンニュウ、マキノセンニュウといった草原性鳥類が多数棲息しています。

また、砂嘴は荒波に曝される根室海峡側と浅くて静かな湾内という対照的な風景を持ち合わせます。根室海峡側は沖合いをミンククジラやシャチが移動していきます。時に

はオオセグロカモメやシロカモメ、ハシボソミズナギドリなどの大群が小魚を追いかけている光景に出会ったりします。波が静かな時はウミスズメやピロードキンクロ、クロガモ、コクガンといった海鳥がじっくり観察できます。かたや湾内に目を移すとカモやハクチョウ、シギ・チドリの群れを見ることができます。

しかし、あまりにも広大であり、どこを観察場所にも選んでもそれぞれに魅力があるので、ここが素晴らしいですよとお薦めするには私には無理です。そこで私が生涯の修行の場所と選んだ野付半島の先端部の鳥たちを、ご紹介申し上げます。

ここは野付崎と名づけられ、現在進行形で発達成長している砂嘴です。いずれ分岐砂嘴になるはずですが。2006年10月7日に通過した強烈に発達した低気圧によって海から打ち上げられた砂は積砂40cm以上に達しました。それまで生えていた草がすべて砂に覆われてしまっていたのです。手のひらの一俵ほどのホタテが一面に打ち上げられ、ホタテ畑かと思えるほどの有様でした。毎年大小の差こそあれ、このような嵐が通過するたびに砂嘴は肉づきを増し、どんどん先に伸びていくのだと実感しました。

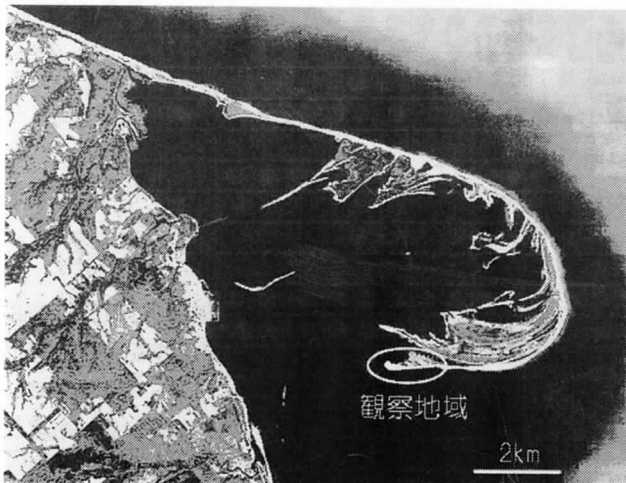
この野付崎で本格的に鳥を観察し、記録に残し始めたのが2005年4月からです。今回は2005年4月から2007年10月まで103日間の記録をまとめたものです。野付半島の鳥を語るにはあまりにも局地的であることを御了解ください。

調査地域は写真で見ていただくと嘴を開いたようになっている場所です。主にガンカモ、カモメ、シギ・チドリといった仲間が多く見られます。

ガンカモの仲間

今最も調査の中心にしているコクガンは10月上旬に姿を見せます。3シーズンで気づいたのは、はじめに野付崎の小入り江に集まり、数が増えるにつれて湾内の奥の方で見られるようになることです。湾内に氷が張ってくる12月末頃まで2,000羽ほどが滞在しています。記録を比べてみるとオオハクチョウとコクガンの渡来渡去の時期と個体数変動がとても似ています。氷が張る1月・2月は数が減少し、3月になると再び増加、4月下旬の渡去期にピークとなるまで似ているのはびっくりです。

さてカモ類はオナガガモとヒドリガモの数がもっとも多く、秋と春の主人公です。分岐砂嘴の間に出来る干潟の水面に集まります。汽水域となる先端の周りにはスズガモが



野付半島野付崎の観察地域

多く集まります。4月初旬から5月初旬には5,000羽から30,000羽になります。小魚を追いかけて群れが動いて行く様は、すごさをおぼえます。また同域にはコオリガモとクロガモが見られます。コオリガモは11月下旬に姿を見せ、5月初旬までいます。11月から4月初旬までは4羽から30羽ほどの少数群でいますが、4月中旬に突如4,000羽以上の大群になります。激しく小移動を繰り返し水しぶきを上げます。渡り前のディスプレイだとすればとても興味深い行動です。クロガモは9月下旬に姿を見せません。透き通る



野付半島野付崎の観察地域

憂いのある口笛に似た声は、目立たない黒い群れの存在を知らせてくれます。大きな群れは作らず、5羽から30羽ほどで行動しています。6月初旬頃までいますが、2006年6月4日に560羽の大群になっていたのには驚きでした。また7月に居残ったと思える58羽の群れがいました。

ほかにウミアイサが目立ちます。10月初旬に現れ、12月に入ると急に数が増えます。3月の下旬まで湾内や外海で群れています。群れが集団行動をとりチカの群れを追いかけて捕食しているのは、ペリカンの追い込み漁を彷彿させます。カワアイサが2月から3月に短期ですが姿を見せます。

シギ・チドリの仲間

先端部の干潟や砂嘴はほとんど砂地や小石なので種類や個体数は多くありません。目立つのはキョウジョシギです。4月下旬から5月中旬にかけ50羽から2,400羽の群れが現れます。5月下旬から6月上旬に全く姿を見なくなります。6月中旬から10月初旬まで10羽から20羽の群れがぼつぼつ観察されます。大群で姿をみせるのはトウネンとハマシギです。トウネンは7月中旬から下旬にかけて個体数が増えます。ハマシギは4月下旬から5月初旬、10月下旬に多数の群れが現れます。

繁殖をしているシギはオオジシギとアカアシシギです。アカアシシギは渡ってきた頃と、ヒナに給餌している頃が観察しやすいです。

チドリの仲間ではメダイチドリがよく観察できます。6月初旬から11月中旬までいます。10月中旬に数が多くなり

ます。大型のチドリではダイゼンがぼつぼつと見られます。その期間は8月中旬から10月下旬まで。ハマシギやメダイチドリの群れに混じっていることが多いです。

カモメの仲間

オオセグロカモメ、ウミネコ、シロカモメが多くいます。オオセグロカモメは、ほぼ通年見られますが、繁殖期の4月から7月まで個体数が減少します。それは繁殖地が知床半島や根室半島、国後島など遠くにあるからだと思われます。ウミネコは11月下旬から3月上旬までいなくなりますが、あとはずっと観察できます。シロカモメは9月下旬から姿を見せ、5月中旬までいます。冬期はオオセグロカモメより多く見られます。

スズメの仲間

スズメ目の中ではヒバリとユキホオジロに砂浜でよく出会います。ヒバリは4月上旬に姿を見せ、野付崎の最先端で2番いが繁殖しています。砂嘴のような新天地に最初に定着している種だと思います。10月上旬には一時的に30羽以上の個体が見られました。これらは渡り途中の個体らしく次々と海を渡っていきました。ユキホオジロは11月上旬やってきます。そして4月上旬までずっと滞在しています。1月から3月までは10羽から67羽の群れでいます。古い砂嘴はハマナス、エゾカンゾウ、センダイハギなどが密生していて、そこにはシマセンニュウとマキノセンニュウが高密度に棲息しています。

タカの仲間

最後にタカ目になります。一年を通して観察できるのはオジロワシだけです。11月中旬にオオワシがやってきて、4月上旬までいます。12月上旬からはオジロワシよりもオオワシの方が多くなり、3月下旬までその状況が続きます。4月中旬から6月中旬まではオジロワシの個体数が増えます。この時期オジロワシは繁殖地に渡るために集まってきたカモの群れの周辺にいます。カモを狙って集まっている個体だと思われます。

9月下旬から10月上旬にはハヤブサやオオタカ、ノスリ、コチョウゲンボウが現れます。これらは渡りの時期に集まってきているカモやシギ・チドリ、カワラヒワ、タヒバリなどを狙ってきています。ただハヤブサは12月上旬までいます。カモを狙っているからだと思えます。

以上2年7ヶ月の短い期間ではありますが、111種の鳥を先端部だけで観察できました。識別能力不足ゆえに確認できない個体も多くなりましたが、なんといってもコクガンの越冬が確かめられたのが大きな成果でした。個々の種に関してはかなり面白い観察が出来ましたので、いずれ機会がありましたら御紹介させていただきたいと思えます。

天塩川中流域におけるカワウの記録

旭川市 磯 清 志

はじめに

カワウは近年、全国的に分布を拡大し、北海道では1999年頃から観察例が増加しており、幌延町の天塩川下流部では営巣も確認されている(藤巻2000)。しかし、天塩川上中流部での観察例はなかった(松本他1986; 1992, 建設維持管理センター2001)。

今回、天塩川中流部で確認したカワウの罫(ねぐら)の状況と、その周辺地域での生息記録を併せて報告する。

天塩川中流域と罫周辺の環境

天塩川は流路延長256km、流域面積5,590km²で北見山地の天塩岳(標高1,558m)に源を発する。士別市、名寄市の山間の平野を流れ下り、さらに天塩平野を蛇行し、天塩町において日本海に注ぐ日本最北の一級河川である。中流部は間寒別川合流点から名寄川合流点までで、流域は畑作や酪農が行われ、丘陵帯の狭窄部では発達した針広混交林が河畔まで迫っている。

罫は名寄大橋(44° 21' 32" N, 142° 26' 48" E, 標高100m)の下流1.4kmの左岸にあるヤナギの河畔林にあった。名寄大橋付近では、天塩川は名寄市の東部を南から北へ直線的に流れ、橋の上流部は左岸が雪捨て場、右岸が河畔公園となっている。下流部の両岸とも川岸沿いにオノエヤナギやエゾヤナギ等が細長い河畔林を形成し、左岸の雪捨て場には、幅約100m、長さ約400mにわたりオオイタドリ等の高茎草本群落とイヌビエ等のイネ科草本の草地が形成されている。雪捨て場より下流部の河川敷には川岸沿いと同様な河畔林が広がっている。右岸の河川敷はオオイタドリ、カモガヤ、ススキ等の高茎草本群落が形成されている。後背地は右岸が名寄市の市街地、左岸が畑地である(磯 2007)。

カワウの罫と生息状況

2005年7月21日の日没時、名寄大橋下流のヤナギ林の樹

上にとまる38羽を確認した。翌22日の早朝、先述のヤナギ林に罫をとっていた群れの朝の飛び立ちに遭遇し、写真撮影した。この罫を利用して個体の最大数は140羽である。これは、撮影した写真からカウントした数である。9月22日には42羽の罫入りを確認し、同月26日にも利用されていたが、個体数は30羽まで減少していた。これ以降の生息状況については観察をしておらず、不明である。

天塩川中流部における生息状況は、2005年5月1日に27羽を名寄大橋下流で観察したのが初認で、最も遅い記録は2006年11月12日の美深森林公園の2羽である。その間の天塩川中流域での記録を以下に列挙する。ただし、2007年の観察回数は、1回のみで観察時刻が14時過ぎのため、罫を利用している群れの個体数を把握したものではない。記録は、地名：年月日とし、括弧内は個体数である。

名寄大橋：2005.5.1(27) / 6.20(18) / 7.21(38) /
7.22(150) / 9.22(44) / 9.26(54) / 2006.7.2(101) /
2007.8.18(7)

智恵文沼：2006.5.3(54)

美深森林公園：2006.5.3(8) / 11.12(2)

小車橋：2005.5.3(4) / 6.4(6) / 7.25(74) /

2006.5.3(3) / 5.20(9)

天塩川温泉：2005.7.26(37)

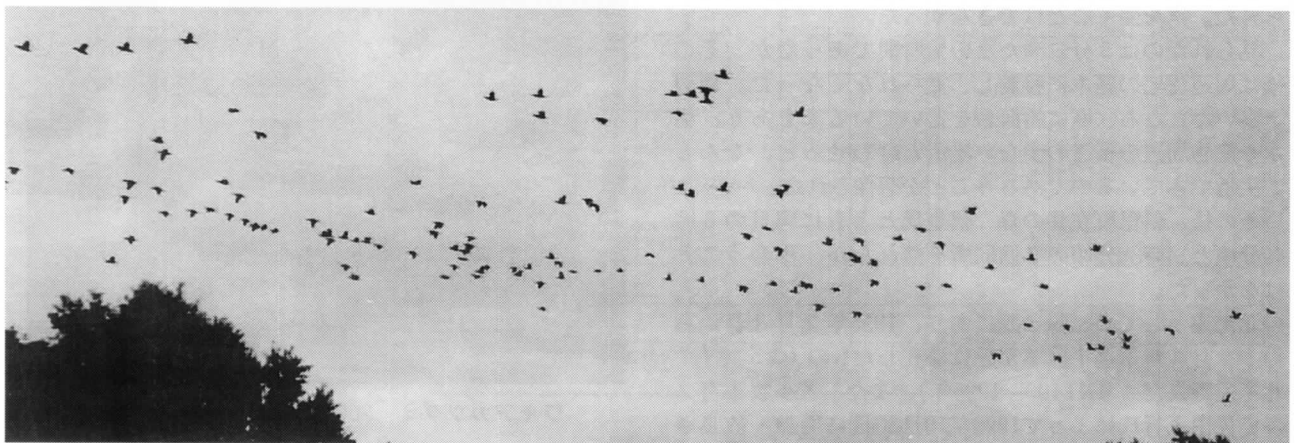
音威子府橋：2005.6.18(2)

箴島橋：2005.6.18(6) / 7.29(41)

カワウに注目する理由

生物学的な面では、カワウは水域生態系の高次捕食者であり、河川環境の変化の影響を最も受けやすい種の一つである。すなわち、餌である魚類の生息量や生物濃縮による有害化学物質の影響を受けやすく、河川環境の生物指標と見ることができる。

カワウは肉食性で1羽が1日に消費する魚は体重1kg当たり262g、1羽の体重は1.5~2.5kgあるので毎日500g程



名寄大橋の罫から飛び立ったカワウの群れ 2005. 7. 21

度の魚を消費することになる（環境省自然保護局2004）。今回一度に確認したカワウの最大個体数は140羽である。この群れが消費する魚は、1羽が500gとすると1日に70kgである。これから現在の天塩川中流部の魚類の生息量が豊富であることが推察できる。

社会的な面では、人間生活との軋轢である。北海道では社会問題化していないが、本州では問題化している地域もある。例えば、罌では、糞や吐き戻しによる樹木の衰弱や枯死・悪臭、鳴き声などの騒音、採食地では内水面漁業における漁業被害などである（環境省自然保護局2004）。

したがって、カワウの個体群の保護管理は健全な河川生態系の保全のためにも、人間生活への被害予防・対策のためにも必要である。カワウは行動圏が広く、広域的な対策が必要であるが、天塩川を含め、北海道内の河川でのカワウの生息状況は十分に把握されていないのが実態である。早急に調査を実施し、実態を把握する必要があると思われる。

引用文献

藤巻裕蔵（2000）北海道鳥類目録 改訂2版．帯広畜産大学野生動物管理学研究室。
磯 清志（2007）天塩川上・中流域の鳥類．層雲峡ビジターセンター研究報告 27：17-28。
環境省自然環境局（2004）特定鳥獣保護管理計画技術マ



樹上にとまるカワウ 名寄大橋 2005. 7.24

ニュアル（カワウ編）（on line）．
建設維持管理センター（2001）平成12年度 天塩川上流河川水辺の国勢調査業務報告書。
松本光二・黒田弘章・水間秀文（1986）名寄の鳥類とその生息環境．名寄市郷土資料報告1：7-18。
松本光二・水間秀文（1992）名寄の鳥類とその生息環境．あかげら 10：50-64。

ワキアカツグミの観察

日本鳥類保護連盟 柳澤紀夫（埼玉県入間市在住）

2007年3月18日の朝6時40分頃（当時の天候は小雪）、斜里郡斜里町の市街地にある、斜里神社の鳥居付近の樹上に2羽のツグミ形の鳥を見つけた。10m程の近距離からの観察で、1羽はツグミ *Turdus naumanni*、1羽はワキアカツグミ *Turdus iliacus* と判定した。

ワキアカツグミは並んで止まっていたツグミよりやや小型で、尾は短め。下から見上げたところでは脇は橙赤褐色で、胸から脇にかけて縦斑が明瞭にある。顔には目の上には淡色の眉斑と、嘴の基部から頬の下にかけて長い淡色の線がある。嘴の基部は淡褐色で、先端は黒っぽく見える。この嘴をやや上に向けた姿勢でいることが多い。雪上へ直接降り立ち、雪の下に頭をいれる行動がみられた。声を聞くことはできなかった。

見られたのは5分に満たない短時間であったが、その後は周辺住宅の庭木に移動し、見られなくなった。周辺を歩いたところ、庭に給餌台を置いている家もあり、樹木や建物周辺の積雪の少ない場所と合わせると、なんとか生活できているのであろうことが想像された。

その後、斜里町在住の森 信也氏とともに同日の8時40分頃と14時30分頃の2回同所を訪れたが、出会うことはなかった。

北海道としての記録は既にあり、1995年2月8日から約1ヶ月札幌市豊平区羊が丘に滞在したもの（森 純子：北海道野鳥だよりNo.100、1995年）、また、苫小牧市宮ノ森で佐田正行氏によって1996年10月30日に標識・放鳥さ

れた性別不明、第1回冬羽個体のもの（平成8年度環境省委託調査・鳥類標識調査報告書17p）、さらに1983年3月18日、釧路付近とされる（藤波不二夫：北海道探鳥記、ワイルドライフレポート1：37-50、1985年）もので、北海道鳥類目録改訂2版（藤巻裕蔵、2000年）に採用されている、などのものがある。

比較的記録の少ない種と思われるので報告する。

同行の佐藤悦子、佐藤松範、柳澤かほるの三氏、ならびに本稿の完成にご協力いただいた樋口孝城氏に感謝し、お礼申し上げます。



ワキアカツグミ 2007. 3.18 斜里郡斜里町



石狩川河口

2007. 8. 19

江別市 小西 峰夫

定年後、第2ラウンドの勤めも終え自由人になりました。どちらかと言えば家庭を顧みず(?) 仕事中心の生活でしたが、自由時間を持てるようになり、これまでとは違った「おじさんの時間割」を考える必要に迫られて色々考えましたが、この際、一つぐらいは、妻と同じ趣味を持つのが得策ではないか、と4月から入会させていただきました。

素人には難しいので不安もありました。探鳥会に参加回数、「入っています」と最初は耳慣れない言葉でしたが、リーダーの方々が目指す野鳥をスコープにすばやく捉え、さりげなく見せてくれるのです。いつもマナーを含めて様々なポイントを初心者にもやさしく教えていただき、鳥を見せる楽しみを熟知されている皆様の心遣いに感謝しています。また、コースをたどりながら、参加者同士の楽しい語りもあり、会に入会出来て本当に良かったと思っています。道内5~6箇所の通勤族の私でしたが、それぞれの地域で多くの野鳥がさえずっていたのでしょうか。今思えば、見る目、聞く耳を持っていなかった自分を反省しています。

初心者として、図鑑を見ながら名前を覚え、様子を知ることが、愛護・環境問題・環境教育に繋がる第一歩になるなど、と妻に理屈をつけながらアルコール付の個人的反省会も以前より充実し、毎回の探鳥会を楽しみにしているこの頃です。これからも宜しくお願い致します。

今回の探鳥会は石狩川河口です。久しぶりの再会なので少しはやめに到着(30分前)しましたが、既に、にこやかな笑顔と共に、和やかな会話が聞こえていました。河口方向をウォッチングしている人も数名いましたが、早速教えていただき、会のスタート前になんと「クロツラヘラサギ」を見ることが出来ました。初心者の私は、何も知りませんでしたが、例の個人的反省会で、たまたま、野鳥だより(H16. 9. 21発行)を見ていたところ広報部からの「クロツラヘラサギ」の記事が載っており、世界全体で500~800羽しかいない絶滅危惧種に指定されていることや、道内の観察例などを知り驚きと同時に感動しました。海岸方向から海水浴客に見られながら砂浜を足腰の鍛錬も兼ねて歩き出しました。しばらくしてウミネコやトウネンなどをウォッチングしながら、結構強い日差しにもかかわらず、さわやかな風をうけて所定のコースを楽しく回ることが出来ました。皆様に感謝します。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、クロツラヘラサギ、トビ、マガモ、トウネン、アオアシシギ、ソリハシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビ

タキ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 23種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、今村三枝子、白田 正、大島 武、大貫利枝、香川 稔、苅部栄一、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小泉三雄、坂井伍一・俊子、佐藤幸典、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、高田征男、竹田芳範、高橋良直、田中洋・雅子、田辺 至、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保・以知子、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、広木朋子、辺見敦子、真壁スズ子、松木 修・ゆう子、松原寛直・敏子、村上茂夫、紅葉昭彦、安 真一郎、柳川 巖、山本和昭、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上 53名

【担当幹事】佐藤ひろみ、横山加奈子

鶴川河口

2007. 9. 2 札幌市中央区 吉中宏太郎

前日セットした目覚まし時計に起こされて、5時30分起床。今日は鶴川での探鳥会です。

ゆっくりしていたら時間オーバーとなり、ご一緒する浜野さんとの待ち合わせ時間に遅れてしまいました。

私は女房に誘われて、今年3月のウトナイ湖探鳥会に参加し、ここで愛護会の家族会員の申し込みをさせていただきました。野鳥に関心が有ってというよりは、緑の多い中を歩く事が魅力の入会でした。出かける場所は初めての所が多く、楽しく参加させていただいております。鳥は今まで見るのではなく、『観る』の字があてはまっていました。この会に入って皆さんのお話しをお聞きし、鳥を見る事は限りなく奥深いものだと分かってきました。私のたよりない気力、体力、知力に合わせて、鳥を見る事に関心を持って参加して行きたいと思っています。

探鳥会集合場所での朝のミーティング、お集まりの皆さんは鳥暦〇年・〇〇年の先輩、なかなか迫力があります。私は皆さんのお名前も、殆ど覚えられずいつも初めて参加した時のように緊張しますが、お顔は少しずつ覚えて来ています。この会に参加していつも思うのですが、この会では『歩く・見る・聞く』の三つは当たり前なのでしょうが、これらを同時に行うのは、なかなかレベルの高いことです。生涯学習として、幅広い年齢層の方々が楽しく参加できる、とてもすばらしい場です。

ミーティングが終わり出発です。この頃は鳥の声が殆ど聞こえなくなり、姿もめっきり少なくなっています。どこに鳥がいるのだろうか、広々とした野原の緑は黄色に変わり、色とりどりの野花在咲いて美しい秋景色に目が行きます。こうして歩いている事に満足感が満たされます。

双眼鏡で見ると川向こうの岸に、アオサギの群れ、黒い点が転がるようになにかが動いて見えます。周りの方から「カイツブリ、メダイチドリ」の声が聞こえます。黒い点

はチドリなのか、スコープで見せていただき、なるほどと姿を確認しました。

「キリアイがいます」とわざわざ知らせに来ていただきました。皆さんが並んで見ている隙間から同方向を見定めて見ましたが、草だけが見えて鳥は見えず、お隣のスコープで見せていただき、やっと場所が分かりました。頭が綺麗な縞柄でした。脇で羽の特徴を話されているのを聞き、なるほどと確認させてもらいました。レンズを通して見る鳥の姿・色は肉眼で見るとは違い力が有り、美しく一つの作品を見る思いです。

鳥は羽が毎年生え変わる事を知り、鳥によっては時期によりすっかり色が変わり、別の鳥の様に見えることを教わり、おどろきました。

今日も草原、河口、海の風景の中で、数は多くありましたが、鳥を見る事が出来とても満足な一日でした。この会をお世話して下さっている方々に感謝しております。

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、アオサギ、トビ、マガモ、ホオジロガモ、メダイチドリ、キリアイ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 22種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、岩崎孝博、萩野裕子、小山内恵子、門村徳男、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、佐藤辰夫、品川睦生、高橋トオル、高橋弥生、高橋良直、高山晏子、辻 雅司・方子、戸津高保、徳田恵美、成澤里美、根本幸子、橋倉慎吾、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、藤井真知子、松木 修・ゆう子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山田良造、山本昌子、柳川 巖、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸 以上 38名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

野幌森林公園

2007. 9. 9

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、マガモ、キジバト、アオバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カケス、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、勝見輝夫・真知子、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、坂井伍一、佐々木、品川睦生、信田洋子、清水朋子、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保、成澤里美、浜野チエ子、平野規子、広木朋子、細谷 理・君江、真壁スズ子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山田良造、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上 32名

【担当幹事】品川睦生、成澤里美

石狩川河口

2007. 9. 30

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、マガモ、ダイゼン、オオソリハシシギ、イソシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、オオジュリン、カワラヒワ、ハシボソガラス 以上 19種

【参加者】青木賢男、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、太田清美、勝見輝夫・真知子、岸谷美恵子、小西峰夫・芙美枝、坂井伍一・俊子、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、新城 久、高橋きよ子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正弘子、成澤里美、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山田良造、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、渡辺 借 以上 36名

【担当幹事】岩崎孝博、横山加奈子

宮 島 沼

2007. 10. 7 札幌市北区 田中 洋

「助けてくれー！ものすごい数の“マガン”たちがこっちをめぐって突進して来るーっ!!ウワーッ!!!」と怖くて手で顔を覆う。次の瞬間、ふっと・・・静寂が訪れ、目をゆっくり開け、周りを凝視すると、自分のベッドの上。

「あーっ夢か・・・」と、ボーッとした記憶の中で、そういえば昨夜、「明日の探鳥会は半年ぶりの宮島沼だ」「今回もまた以前のように“カリガネ”や“トウゾクカモメ”に会えるといいなあ」などと思い、同時に陽もまだ明けやらぬうちのあの数万羽の「鳥たち」の圧巻な大群舞を絶対に見てみたいと思い巡らしながら床に就いたことを、今思い出した。

その壮大な早朝の群翔観察は、わが「相方」が早起きは不得手なので断念してはいたが、夢遊していた私は朝の2時半に意識過剰（見たい一心）で覚醒してしまっていたのである（ただの頻尿で起きただけかも）。

集合時間より30分早く到着。しかし、愛護会副会長T氏など数名の方がすでに鳥見中。早くもハジロカイツブリやツルシギ、オナガガモをスコープに入れ、私も早速覗かせて頂き「駆けつけ三杯」ならぬ、「駆けつけ三羽」を観させて頂いた。

その後、皆さんが全員集合し、公式に探鳥会へと突入した。「鳥たち」はかなり沼の端側に陣鳥（取り）、望遠鏡がないと判別しにくい（私だけ？）程の遠距離。しかし流石に、「鳥人間」？の方たちは、ヒシクイ、シジュウカラガン等次々と同定。修行中の身の私にはまだまだ同定が難儀です。頑張らねば。

秋季の宮島沼探鳥会は、私個人としては通算4回目。私

がこの愛護会に入る最初のきっかけとなった記念の探鳥地。その記念すべき地で、日広報幹事代表より私にとって入会以来、初の原稿のお声をかけていただくとは、何かの「縁(えにし)」でしょうか？

3年前の同時期に私たちがドライブ中でたまたま立ち寄った際に、なにやら大人数で光学器械を操り「鳥」さんたちを眺めている方々と居合わせた。とても興味深く知識の豊富な方達(特に説明解説でエンターテインメント性のある素晴らしい探鳥幹事のK氏)や肉眼とは全く異なるスコープの中の美しき別世界。そして、コハクチョウやハヤブサの「鳥の飛翔」に囚らずも目頭が熱くなるほど感動し、入会をその場でしました。同幹事K氏曰く「現地ですぐに入会するなんて、珍しい人達だな」と(私らは絶滅危惧種か!!)。不覚?にもまさか「鳥」をこんなに魅入るとは、わが人生、青天の霹靂、驚天動地、想定の外の出発事。

それから2年と数ヶ月経ち、定例の探鳥会、鳥見はもちろんですが、「鳥」の如く人生の「山」「川」「谷」を越えられ、渡られてきた個性豊かな当会の幹事さんや会員の方たちのお顔を拝見する楽しみ、すなわちバードウォッチング+ヒューマンウォッチングが今の私の「至上の喜び」。次はどんな「鳥」に会えるか、どんな「人」のお顔が見られるのかがとても楽しみです。

「鳥」を知ったことで、人生の「時」がとても早く進むように感じ、より若い時期に知りえればより深くと思う一方で、若輩(今も若い?)では「鳥の良さ」は理解しえなかったかも知れない等、と考える今日この頃です。人生は二律背反、「鳥」は哲学ですね。

いま何が幸せかって、探鳥の日が青く晴れあがった時、これ最高にしあわせ・・・だなあ。会員のA女史いわく「嵐や、大雨の日が私たちの洗濯日和ね(笑)」ごもっとも。

【記録された鳥】カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ、シジュウカラガン、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ツルシギ、ユリカモメ、キジバト、ハクセキレイ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス

以上 28種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、北山政人、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一・俊子、笹森繁明、品川睦生、高栗 勇、高田征男、高橋良直、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、道場 優、戸津高保、浪田良三・典子、野中美香、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城、真壁スズ子、松原寛直・敏子、松原綾子・ゆたか、吉中宏太郎・久子、山本和昭

以上 38名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

野幌森林公園

2007.10.14 札幌市中央区 武沢 和義

久しぶりの野幌森林公園であった。短時間、小雨が降ったり、晴れ間が見えたりしたが、平均的には、比較的明るい曇り日であった。まだ葉が落ち終わっていない落葉樹の間を、渡り遅れた鳥たちが移動していく。そんな季節だったのだろうと思う。

出発してまもなくのことである。誰かが褐色の葉の陰に留まっている鳥を見つけた。種類は判らない。ほぼ全員が、先ず双眼鏡で姿を捉えて、何がいるかを判断しようとするのだが、なかなか判らない。私が見ていた位置からは、背中から尾にかけての部分が見えたが、全体の姿は捉えられなかった。誰かが「アカハラだ」と言っている。そこで場所を変えて探そうとしたが、見つからない。まるで「隠し絵」の世界である。「目の上の白い線が見えた。マミチャジナイに間違いない」という声が聞こえて一件着落かと思われたが、納得しないグループがいた。そのうち「二羽いるよ」ということになり無事に解決する。そして、私はアカハラとマミチャジナイとメモを取る。

昼食後のことである。小さな鳥が、枝の間を忙しく移動していた。少し遠い。しかし「メジロらしい」という判断の声が聞こえたので、双眼鏡を覗くと、いわゆるウグイス色の小鳥かと思われる姿が見えた。しかし「頭の黄色が確認できた」と近くで声がする。もうキクイタダキに決定である。

私は、数年か、もう少し長い間、探鳥をさぼりがちである。また年令の関係もあって忘れっぽくなっているので、初心者に戻りつつある。逆に、初心者から抜けだそうとしている人、あるいは抜けだした人にとっては、種名を判断するポイントがよく判る面白い探鳥会であったのではないかと想像する。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、マガモ、コガモ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、アカハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、カケス、ハシブトガラス

以上 26種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、今村三枝子、牛込直人、影安則子、勝見輝夫・真知子、加藤千春、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一・俊子、笹森繁明、信田洋子、白澤昌彦、高田征男、高橋きよ子、武沢和義、田中 洋・雅子、戸津高保、中正憲信・弘子、長尾由美子、成澤里美、畑 正輔、濱野由美子、早坂泰夫、平田紀子、広木朋子、辺見敦子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、安真一郎、安田義雄、横山加奈子、吉田慶子

以上 40名

【担当幹事】後藤義民、武沢和義



【小樽港】 2008年1月20日(日)

昨年と同じように、札幌からの貸切バスを利用して行きます。探鳥コースは日和山灯台付近、祝津漁港、小樽港、フェリーターミナルなどで、

海ガモ類、カモメ類、ウミスズメ類などが中心です。アビ類も見られるかもしれません。以下の要領で行いますので、参加希望者はお申込み下さい。

集合場所 札幌市中央区大通西3丁目
道新ビル前(大通側)

出発時刻 午前8時20分

帰着時刻 午後4時頃

定員 45名

参加費 1,500円

申込先 ^{かまさわ}蒲澤幹事(011-663-9783)

1月5日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

その他

- ・大通から小樽まで直行し、小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食を取ります。昼食を持参下さい。食堂もありますが、混雑の恐れがあります。
- ・往復とも途中乗車・下車の場所を設けることは予定していません。

【野幌森林公園】 2008年2月3日(日)

雪に覆われた森は、厳しい寒さの中で近づく春を待っています。この時期に見られる鳥たちは、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥と、留鳥のアカゲラ、コゲラ、キバシリ、キクイタダキ、カラ類、そして冬によく見られるウソ、シメ、カケスなどです。フクロウにも会えるかもしれません。

集合 午前9時 野幌森林公園大沢口

交通 新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【円山公園】 2008年3月2日(日)

日中の日差しにも春が感じられる季節を迎えています。キツツキ類、カラ類などのいつも見られる鳥に加え、ツグミ、カワラヒワ、アトリ、ウソ、シメなどが見られます。さえずりも聞かれ始めます。午前中で解散の予定です。

集合 午前9時 円山公園管理事務所前

交通 地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】 2008年3月23日(日)

日本各地やさらに南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期群れをなして北の繁殖地に渡りはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡り鳥の中継地として賑わいを見せ始めます。多くのカモ類の他、オジロワシやオオワシなども観察されます。集合場所からサンクチュアリまで歩き、サンクチュアリ建物内で昼食となります。まだまだ寒い時期ですから、暖かい身支度でご参加下さい。

集合 午前9時30分 野生鳥獣保護センター駐車場

交通 千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせ

白澤幹事(011-563-5158)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内

・日時 平成20年1月12日(土) 13:30(開演)~16:30

・場所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

札幌市北区北8条西3丁目

☆JR札幌駅北口より徒歩3分

☆地下鉄南北線札幌駅より徒歩7分

(公共地下歩道で札幌駅12番出口から建物内まで直通)

※前年とは場所が違いますのでご注意ください

・講師 小堀 煌治氏(北海道野鳥愛護会会長)

・演題 「インド探鳥旅行」

・講演内容

「インドは茫洋と混沌、分かりづらいけど行ってみたい国」そんなふうを考えていました。一昨年「インド探鳥旅行」の企画があり、行ってきました。予想どおり「何でもあり」の国でした。動物を大事にしている国で動物のはびのび、野鳥は種、個体数とも豊富でした。写真を見ながらお話しします。

・野鳥写真映写

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。たくさん作品の参加をお待ちしています。写真準備などの問い合わせは高橋幹事まで。(BRB32264@nifty.com)

・会費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、三和ビル地下)で行います。会費は3,000円程度です。前もっての申込は不要です。どうぞご参加下さい。

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>